主体性に対する抗議であった。

その後は、雑誌『中国』を一〇年にわたり発行し、晩年は、『魯迅全集』の完訳に専念し、一九七七（昭和52）年三月三日、六七歳の生涯を終えた。

●「信州第一主義」と臼田

竹内と同じく旧臼田町出身で、中央公論社編集者時代から竹内と交流のあった作家の井出孫六は、「うちの亭主は『男は信州、漬物は信州、みそ汁は信州、何でも信州だ』と言って聞かないような人でした」という夫人の回想を紹介し、「家ではとにかく〝信州第一主義〟であった」と述べている（二〇〇八年一月一日付『信濃毎日新聞』）。

自宅書斎でくつろぐ竹内　筑摩書房提供

だが、意外なことに、竹内自身が信州のことを直接記した文章は少ない。

しかし、信州とりわけ臼田に対する想いは熱い。竹内は、『佐久教育』第一〇号（昭和50年3月）によせた「佐久を思う」という文章で、次のように述べている。

「私と佐久の結びつきは、この臼田へのたまさかの帰郷がほとんどその全部である。（中略）しかし、定住を別にして、立寄る回数の一番多いのは、なんと言っても佐久である。一回の滞在が数日からせいぜい十数日であるにせよ、過去六十年間二十回か三十回は臼田との間を往復しているはずである。生活を経験しないために郷土感がうすい。しかし、逆に、もし生活していれば偏屈（へんくつ）な私のことだから反逆していたかもしれない。やはり故里は遠きにありて思うほうがよい。千曲の流れと浅間の景観は自分の精神の一部に血肉化されていることは否めないように思う」

●魯迅『故郷』の翻訳者

現在中学校国語教科書で採用されている魯迅の短編小説『故郷』は、竹内好『魯迅文集』（筑摩書房）に収録された訳本が底本として使用されている。

『故郷』は、かつて地主であった主人公が、今は没落してしまった生家の家財を引き払うために、二〇年ぶりに故郷に帰ってくるところから話が始まる。主人公の想いでの中で美しかった故郷はすっかり色あせていた。

『故郷』に描かれた主人公の生家の没落や故郷からの退去は、魯迅自身の経験がもとになっているといわれる。「故里は遠きにありて思うほうがよい」とする竹内と魯迅の想いは、ここでも一体となっている。

（伊藤純郎）

魯迅に関する竹内の著書
魯迅文集（筑摩書房）・魯迅（講談社）

参考文献

竹内好「信州と旧友と私」『潮音』一九六一年一月号
『思想の科学』第九一号（竹内好研究号）思想の科学社
鶴見俊輔『竹内好ある方法の伝記』岩波現代文庫

肖像写真提供
筑摩書房

佐久の先人たち⑯

日中友好に尽した文学者

竹内 好（たけうち よしみ）

（1910～1977年）

太平洋戦争の応召直前に『魯迅（ろじん）』を執筆、戦後は岸信介内閣による新安保条約強行採決に抗議して東京都立大学教授を辞任するなど、近代日本のありかたを中国との関係のなかで問い続けた現代中国文学者。

●太平洋戦争と著書『魯迅』

竹内好は、一九一〇（明治43）年一〇月二日、南佐久郡臼田町臼田（現佐久市）に生まれた。父伊藤武一は、松本中学校（現松本深志高校）卒業後、税務署員として臼田に居住し、竹内家に入籍した。母起よしは、東京の渡辺女学校を卒業した才媛で、静かに深く考える慎重な性格は、起よしに似ているといわれる。

三歳の時、父の転勤により東京に移住し、東京府立第一中学校（現日比谷高校）・大阪高校（現大阪大学）をへて、東京帝国大学文学部支那文学科に入学した。

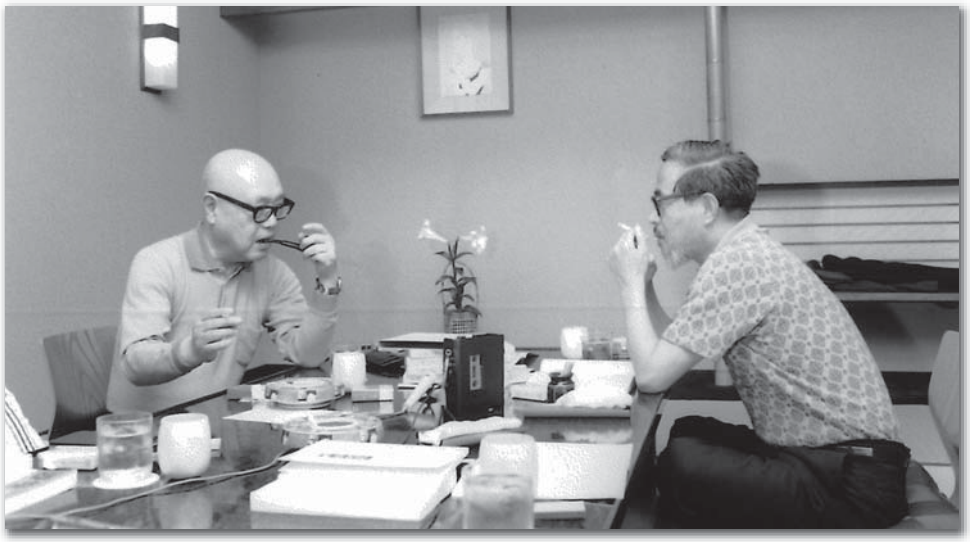
在学中に、『司馬遷（しばせん）』の著者として知られる武田泰淳（たけだたいじゅん）らと中国文学研究会を結成し、一九三七（昭和12）年から二年間、日中戦争下の北京に留学した。

陸軍に召集される直前の一九四三（昭和18）年、竹内は、最初の著書である『魯迅』を、明日の命すらわからない状況のなか、遺書に近い気持で執筆する。

魯迅（一八八一―一九三六年）は、清朝を倒した辛亥革命（しんがいかくめい）（一九一一年）後も西洋列強や日本の侵略と支配に苦しんだ中国にあって、封建制でも西洋近代でもない「第三の時代の創造」を訴えた人物である。他者から支配されることを拒み、また他者を支配することによって自らが解放されることをも拒む魯迅の態度に、竹内は「抵抗の主体」を見出し、『魯迅』を描いた。

一九四五（昭和20）年、湖南省岳州（現岳陽（こなんしょうがくしゅう））で敗戦を迎える。それより以前、太平洋戦争を支持する「大東亜戦争と吾等の決意（宣言）」を『中国文学』に書いた竹内は、のちに「よろこびと、悲しみと、怒りと、失望のまざりあった気持」で迎えた八・一五は「私にとって、屈辱の事件だった」と回想した。

太平洋戦争で日本が敗戦したことではなく、日本のファシズムや中国との戦争を防ぐことができなかったことを「屈辱」と記す竹内は、以後、中国への罪責感（ざいせきかん）を強くもちつつ、その生涯を中国文学研究に尽す。



親友であった武田泰淳（右）と対談する竹内（左）
筑摩書房提供

●抗議の辞職

一九六〇（昭和35）年五月、竹内は、岸信介内閣による衆議院での新安保条約強行採決に抗議し、「憲法の眼目の一つである議会政治が失われた」と、東京都立大学（現首都大学東京）教授を辞職した。新安保条約が日中国交回復の障害になることに加え、アメリカに追随して中国を敵視する、日本という独立国家の